

書評

堆積学の潮流—地球科学の基礎分野

岡田博有著

古今書院, 2007年7月20日発行, 172pp.
ISBN4-7722-5108-1, 3,500円(税別)

2006年夏, アジアで初めて開催された国際堆積学会議は成功裡に終了した。本書の著者である岡田博有氏はこの会議開催を心待ちにして, 雑誌「堆積学研究」に堆積学の歴史を書き綴ってこられた。それらをまとめた本書の上梓は会議開催直前であった。著者の歎びが本書全体から伝わってくる。評者のほうは, 1998年から連載の始まった「堆積学の歴史」を毎回楽しみにしていた。今, その合本である本書を手にして, ただ合本しただけではない, 大きな重みを評者は感じている。

堆積学は20世紀の中頃確立した, きわめて若い学問と, 著者はいう。地質学とともに地球科学の一分野として堆積学は発展してきたが, 本書はそれに貢献したパイオニアたちの業績と人物を紹介し, 堆積学への貢献の歴史を概観している。堆積学は幸せなことに歴史を片手に握って生まれてきたようだ。目次に沿って, 紹介されているパイオニアたちを見ていこう。

1. 堆積学序論: 堆積学の確立する前は地質学自身の歩みがある。ウーリッセ・アルドロヴァンディ, ニコラウス・ステノ, チャールズ・ライエルなどの名前が挙げられている。
2. 堆積学潮流の始まり: 著者は, イギリスのヘンリー・クリフトン・ソービを堆積学の父としている。堆積岩を偏光顕微鏡で観察し; 堆積構造からみた古流系の重要性を強調し; 実験的研究を導入し; 現在の海や河川の堆積物と生物を研究したからという。19世紀後半のことである。
3. 地層の研究本格化—地層学の確立: 地層学をほぼ同じ時期に提唱した, ドイツのヨハネス・ワルター, ロシアのニコライ・ミハイロヴィッチ・ストラホフ, 日本の今井半次郎が挙げられている。20世紀初頭のことである。
4. 先堆積学の時代: 堆積物の見方を重視したアメリカのグローブ・カール・ギルバートとジョセフ・バレル, 層序学者アマデウス・ウィリアム・グレイボー, sedimentologyという言葉に拒絶したウィリアム・ヘンリー・トゥエンホーフエル, そして日本の高橋純一を紹介している。これも20世紀前半である。
5. 堆積学」の用語提唱: 「堆積学」を1929年に使い始めた八木次男, 1930年に提案したハコン・ワーデルをあげている。
6. 堆積組織学の確立: 堆積物の粒径尺度を初めて提唱したジョン・アウグスト・ウーデン, ウェントワース尺度のチェスター・キラー・ウェントワース, ファイ尺度を提唱したウィリアム・クリスチャン・クルンバインが並んでいる。
7. 堆積岩石学の確立: 堆積学の父ソービを継承したフランスのルシアン・カユー, ロシア生まれでアメリカに移住したポール・ディミトリ・クリニンを挙げている。
8. 混濁流学説の確立: イギリスのエドワード・バタースピ・ベイリーとイギリス生まれでオランダの研究者となったフィリップ・ヘンリー・キューネン, バウマ・シーケンスを提唱したアーノルド・ヘイオ・バウマと堆積物重力流を提唱したジェラルド・ヴァイナー・ミドルトン。現在もおお現役の研究者たちである。
9. 堆積学の発展: ここは現在の堆積学の動向が記されている。動的堆積学のジョン・ロバート・ローレンス・アレン, ロバート・ヘンリー・ドット, 非碎屑性堆積学のジェラルド・マンフレッド・フリードマン, ロバート・ルイス・フォーク, 束層層序学のローレンス・スロス, ピーター・ヴェイル, アンドゥルー・ダーウエント・マイアル, 20世紀最大の堆積学者フランシス・ペティジョン, イタリア堆積学のエミリアノ・ムッチェッティ, インド堆積学のスプリヤ・モハン・セングプタ, 造構堆積学のマリアン・クシヤ

ンツキーヴィッチ, ハロルド・ガーナー・レディング, 深海堆積学のケネス・ジンファ・シュールなど現在バリバリの研究者が並ぶ。

10. 国際堆積学協会の成立: パーシバル・アレン, デイルク・ジャコブス・デグダスの大きな功績が述べられている。
11. 文献と人名索引と事項索引が並ぶ。

科学の発展には特定個人の貢献が極めて大きいと, 著者は主張し, それぞれのパオニアの生い立ち, 生涯, 主な業績などがコンパクトにまとまっている。

以上のように堆積学の歴史をまとめた本書を読んで, 古生物学には何が伝わって来るであろうか。まず, グレイボーのことで, ちょっとびっくりした。グレイボーは中国の古生物学を作った人であることは知っていたが, その前に堆積学者であったことは知らなかった。次に, 堆積学の歴史に古生物学者は敏感である必要があると思った。古生物学者は古環境を復元する際に堆積学の恩恵に与っている。どの時代のどんな堆積学の恩恵に与っているかをチェックしてみるべきであろう。そして, 堆積学の歩みと古生物学の歩みを比較してみる必要がありそうだ。また, 著者が堆積学史に興味を持っているからなのか, 歴代の堆積学者がそれぞれ堆積学史にコメントしていることを著者は逃していない。ヨーロッパとアメリカの研究者がその学風の違いから, ともしれば国際的な学問の推進が危ぶまれたこともあったようだ。あるいは sedimentology ということが確立するまでもいくつか難問があったそうである。堆積学の歴史から学ぶことは多い。

矢島道子

よみがえる恐竜・古生物 【超ビジュアルCG版】

ティム・ヘインズ, ポール・チェンバーズ著

椿 正晴訳, 群馬県立自然史博物館監訳

ソフトバンククリエイティブ, 2006年7月15日発行
ISBN4-7973-3547-5, 2800円(税別)

本書は, イギリスBBCテレビが制作した, Walking with dinosaurs, Walking with beasts, Walking with monstersに登場した生体復元のCGの写真に, 解説と化石の写真などを加えたものである。大部分の場合, 骨しか化石にならない脊椎動物の姿を表皮まで復元することは難しい。生体復元をリアルに描けば描くほど, フィクションの割合が高くなってしまふ。BBCがWalking withシリーズで制作したCGは学術的にも高い評価を得ている。CGの写真なので, その生体復元は一般の図鑑のものに比べて, とってもリアルでインパクトがある。白亜紀後期にアメリカの海に生息した海トカゲ竜(モササウルス類)のティロサウルスが, 水面から飛び出して翼竜に咬みついているシーンなど, 化石の証拠は存在しないものの迫力がある。Walking withシリーズのDVDを鑑賞する際の解説書として最適だろう。ティム・ヘインズはWalking with dinosaursのプロデューサーで, 動物, 自然をテーマとしたライターでもある。ポール・チェンバーズは番組の制作スタッフの一人だが, ロンドン自然史博物館でボスドク経験のある古生物学者で, その後サイエンスライターとして広く知られている。

カンブリア紀から更新世までの112種の絶滅種を解説している。古生代がアノマロカリス, メガネウラ, ディメトロドンなど21種, 中生代はリストロサウルス, イグアノドン, アーケロンなど55種, 新生代がスミロドン, マンモスなど35種が取り上げられている。無脊椎動物は三葉虫とアンモナイトはそれぞれ一項目にまとめられており, 7種+三葉虫とアンモナイトなので大部分が脊椎動物である。中生代の55種のうち, 鳥類を含めた恐竜は27種にすぎない。その分, 海生爬虫類や翼竜, 哺乳類が多く取り上げられているところが, 一般的な図鑑と異なるところでうれしい。2004年に発表された, ヒト(ホモ・サピエンス)とも生息時期の重なるホモ属の小型種(ホモ・フローレンシエンシス)も含まれている。

真鍋 真

カイミジンコに聞いたこと

花井哲郎著

どうぶつ社, 2006年12月20日発行, 269pp.
ISBN4-88622-066-5, 1,500円

「花井さんと話をするとやっぱり何か安心する」。今は亡き阿部勝巳さんは生前しみじみそう語っていた。本書はその阿部さんの名著「ワイングラスかたむけ顕微鏡」(国際書院, 1992年)の源流とも言える、そしてその「安心感」を体験することのできる珠玉の随筆集だ。1981年の「ウミゴボウ」に始まり2000年の「母の部屋」まで、著者が東京大学退官後に教鞭をとった大阪学院大学の学内誌に主に掲載された50編の作品が発表順に収録されている。題材は、進化古生物学(周知の通り、著者はこの生物学的古生物学の日本における開祖だ)の研究や大学での教育にまつわるあれこれ、子供のころの思い出、学生時代や米国留学時に見聞したこと、海洋生物の野外調査のようす、昆虫採集のことや電車の車中での観察などなど幅広い。もちろん単なる随想ではない。科学随筆として一本の筋が通っており、そればかりか自然史科学のよさや楽しさを活写している点において科学随筆の新しいジャンルを築いたとさえ言えるだろう。先に述べた安心感は、この自然史科学の視点と無縁ではないが、それだけで説明がつくわけでもない。

では、どうしたらその安心感を説明できるだろう。思考するにそれには大きく三つの理由があると思う。まず第一に、「本当のこと」「正しいこと」が書かれていること。いくつか例をあげよう。「あらゆる事物は、それに興味を持った人へのみ、心の中を打ち明けてくれるものなのである」(「ウミゴボウ」)。「それにしても、正義、真理、本質、典型、そして最適者など、魅力的な言葉が皆実体のない虚構や、実体のわからないモデルであったとは、まことに残念である」(「虚構(限りなく遠い未来の話)」)。「深い自然認識に達するには、心に余裕があり自由な思索ができて、しかも意欲に満ちた雰囲気が必要なことはいままでもない」(「余裕」)。出版した論文の数や掲載された雑誌の格などを気にしなければならぬのは今や自然史科学でも同様だ。深い自然認識に達するために始めた研究が、いつしか業績を上げることにその目的がすりかわっていたりする。そのような世知辛い世の中で、筆者のゆるぎない言葉は、本当に大事なことは何なのかを再認識させてくれる。

二つめの理由は、ただ読んだだけのことや聞きかじりのことではなく、自分で納得したことや自分の目で観察したことが書かれていることだ。「まえがき」でも筆者は述べている。「子供のときには遊びの中で、大学では同僚や学生とともに、自然や専門のカイミジンコを観察したときの、その眼で世間を見たいという願望をもって」この随筆集を書いたと。この側面では「ある雨の日の海道記」がすばらしいと思う。東京から神戸へと向う新幹線にゆで玉子とビールを購入して乗り込んだ筆者が、次から次へと移り変わる車窓からの東海道の風景を自然史的な(時には文化史的な)注釈を加えながら描写していくという趣向のものだ。真鶴海岸を車窓越しに眺めるのは私も好きだが、その近くの根府川で、大正十二年の大地震の際に崖の崩壊により列車が海中に押し出され、三百人の乗客が車中で溺死したことは知らなかった。この作品を読むと、次に新幹線に乗った際の窓外の景色の見え方が変わるに違いない。

三つめの、そして一番大事な理由は、「笑い」だ。観察事実に基づき正論を述べることはある意味たやすい。しかし、この随筆集の本当にたぐい希な点は、それが全く説教くさくなく、また嫌味でもなく、終始ゆったり柔らかな雰囲気の中でなされていることだ。それはひとえに随所にちりばめられている微笑、朗笑、時には爆笑を催させる語り口によるものだろう。ちなみに、著者がかつて主宰していた東大地質学教室の第四講座は別名「オストラ講座」と呼ばれていたらしい。介形虫(オストラコーダ)を専門とする著者のユーモア精神を象徴する逸話^{いたち}だと思ふ。

その「笑い」の背景にあるものを「鮠ごっこ」という作品は垣

間見せてくれる。大学で三百人の学生を相手に講義をすることになった著者が、いかに学生に欺かれることなく出席をとるかで学生と鮠ごっこを繰り広げるという話だ。もともと「鮠ごっこ」という子供の遊びがあったこと自体新鮮な驚きであったが、さらに心動かされるのは、何回かの鮠ごっこの応酬の後、やはりまだ欺く学生がいることに気づきつつ語られる著者の次の言葉だ。「鮠ごっこは途中で怒ってはいけない。怒らなければ、最後は笑いで終わるようになっていく」。この暖かさに救われた学生がどれだけいたことか。続編の出版を私は心待ちにしている。

遠藤一佳

シカの生態誌

高槻成紀著

東京大学出版会, 2006年6月22日発行, 471pp.
ISBN4-13-060187-3, 7800円+税

本書の表題を見て、これは使えるのでは、とまず思った。古生物学の一つのテーマである古環境復元では、現生生物の生態の情報は不可欠である。特に、化石となった生物と現生生物が同種関係にあるのならばなおさらである。そしてニホンジカは、化石として発見される哺乳類の中でも比較的数多く産出している種類といえる。つまり、ニホンジカ化石を古環境復元の指標とした場合に、応用可能なより詳細な情報を示してくれるのでは?と期待したのである。

ニホンジカといえば日本を代表する大型哺乳類であり、知らない人はいないであろう。日本列島におけるニホンジカの記録は、約22万年まで遡ることができる。そして、古来より狩猟の対象として人間との関係が深かった哺乳類である。そんな哺乳類であるから、その生態は詳しくわかっているだろう、と思って読み進むと実は意外に知られていないことがわかる。

著者は、そのようなニホンジカを追い続けて30年以上になるという。本書は著者が長年調査してきた宮城県の金華山島、および岩手県の五葉山に棲息するニホンジカの生態を中心に、主に著者らの研究例をもとにまとめたものである。著者がフィールドとしてきた金華山島と五葉山は、同じ東北地方にありながら全く環境が異なるという。つまり、金華山島は島という閉鎖系で、一方五葉山は北上山地に位置する。この環境の異なる2地域を比較しながら、ニホンジカの生態を紹介している。そのため、この2調査地の章だけで本書の半分以上が構成される。その他の章でもこれら2地域の例を示している。本書の7割前後は金華山島と五葉山のニホンジカについて述べられているといってもいいのではないだろうか。表題からニホンジカの生態をすべて網羅しているかと思うかもしれないが、著者自身もそうではないと述べているとおり、ニホンジカの生態が非常に多様であることが、たった2地点の比較からでもよくわかる。

本書の内容は、単にニホンジカの生態を述べた本ではない。「はじめに」の中で著者が「植物的環境の中で暮らす存在としてとらえる」といっているように、本書の特徴は植物についての話題も数多く含まれていることである。そのため、内容はニホンジカが生活している環境とシカとの関係の観察、研究記録であり、シカを取り巻く生態学の本といえよう。そして、シカおよび植物食の哺乳類を知る上で、植物を知ることがとても重要であることがわかる。それも分類学的な知識だけでなく、植物の生態を知ることの重要性がわかる。

本書の中で紹介されるニホンジカの行動の詳細な観察、またその行動の意味を様々な方法で解析していく様子は、化石では味わえない生の動物の研究の面白さが伝わってくる。それはおそらく記述方法に関係するのではないだろうか。観察結果をもとに研究テーマ、手法が論理的に述べられ、一連の作業過程の様子が詳しくわかるとともに、各研究テーマ間のつながりも見えるように表現されていて、教科書としても利用できるだろう。

本書の最終章では、古生物に関連する書籍ではまず出会うことのない内容が載せられている。それは「保全」である。保全は現生の生物を扱うときには、避けては通れない一面となってきているのではないだろうか。一見古生物学とは無縁な気もするが、保全の現状を知ることも必要な場合がありそうである。私たちが日頃見聞きしている生物の生態は、本当にその生物が本来持っている生態そのものなのだろうか？ということである。本書を読むと、少なくとも現在日本列島に生息する大型哺乳類は、人間の生活の影響を強く受けていることがわかる。

そして、本書からシカの生態だけではなく、著者の研究に取り組む姿勢もぜひ注意深く読み取ってほしい。著者のフィールド（観察現場）に根ざした研究活動は、古生物学においても共通するだろう。古生物学のフィールドにおける露頭観察はもちろんのこと、フィールドと同様の標本をじっくりと観察することは化石となった生物を知る上でもっとも大事な作業であり、その度に新たな発見をもたらしてくれるものである。

さて、本書の中では日本列島の大型哺乳動物相の変遷についても触れられている。ただ、執筆を手がけた時期との関係なのか、現在ではやや古くなってしまった情報も引用されており、その点は少々残念である。一方で、ニホンジカの種内における遺伝的関係の紹介は、化石からは読み取れないニホンジカの個体群間の関係を紹介してくれている。

初めに本書を手にしたときの、これでニホンジカの化石が産出した場合の古環境の復元が詳細に行えるのではないか、という考えは、本書で紹介されているニホンジカの多様性に富んだ生態を知らば知るほど、そう簡単ではないことがわかった。しかし一方で、ニホンジカのような哺乳類が生息している日本列島の自然、動物相の変遷史にこれまで以上に興味が湧き、また現生生物の生態から化石となった生物の生態やその生息環境を推定する面白さを再度認識できた。本書はニホンジカの生態を学べるだけでなく、哺乳類化石の古生態、古環境を考える上で、多くのヒントを提供してくれる1冊といえよう。

樽 創

学術集会参加報告

ICOS 2006 (The First International Conodont Symposium) 参加報告

はじめに

国際研究集会 ICOS 2006 (The First International Conodont Symposium) がイギリスのレスター (Leicester) 大学で、2006年7月12日～27日の16日間にわたり開催された。この国際研究集会はコノドント研究のバイオニアである Pander, H. C. (1794～1865) によるモノグラフの出版150周年を記念して、これまで ECOS (European Conodont Symposium) としてヨーロッパで開催されてきた研究集会を国際的な研究集会に格上げし、その第一回目となるもので、現在コノドント研究の最先端にあるレスター大学で開催しようとするものである。この国際会議は Pander の偉業を記念し、コノドント研究者が1967年に設立した Pander Society とアメリカの古生物学会 (The Palaeontological Association) および5つの民間企業の後援で行われた。シンポジウムの前に Excursion 1 として、アイルランドの石炭系 (The Carboniferous of Ireland) の5日間の巡検が、またシンポジウム後に Excursion 2 として7日間の巡検 (Iapetus-from coast to coast) が含まれている。筆者らはシンポジウムと後半の Excursion に参加した。



図1. 研究集会の行われたレスター大学地質学教室

シンポジウムの報告

配布された資料によれば、シンポジウムの出席者は20ヶ国85名とのことである。国別では開催国のイギリスが最も多く16名、以下アメリカ合衆国13名、スペイン6名、カナダ、フランス、中国、イタリア、ポーランドが5名、ドイツ4名以下省略で、日本からは筆者ら2名が参加した。シンポジウムはレスター大学地質学教室 (図1) の150名前後が収容できるひとつの教室で行われた。シンポジウムはさらに細かい、以下のような6つのシンポジウムに別れ、基調講演とそれに続く口頭発表から構成されている。(1) Pander's legacy, 150 years on. (2) 'Coniform' conodont apparatuses and architecture-whence and whether? (3) Devonian conodont biostratigraphy. (4) Conodonts, paleobiogeography and palaeoceanography. (5) Triassic conodonts: taxonomy and time scales. (6) Conodont phylogenies-alternative approaches, implications and applications. なお、(5) のシンポジウムは IGCP467 との共催でもある。基調講演と口頭発表は合わせて55件がおこなわれた。シンポジウムの期間中を通してポスターが掲示され、ティータイムやランチタイムに活発な議論が行われていた。また、コノドント化石標本を持ち寄り、地質学教室の SEM (走査電子顕微鏡) を用い、標本についての細かい議論が自由にならなっていた。最終日の昼食時に Business Meeting が開かれ、次回の ICOS は2009年の7月にカナダのカルガリーで開催されることが承認された。

また、同日午後には Paleobiology Workshop と題し、コノドント研究全般に関する非公式な懇談会が設けられた。全体を通しての印象であるが、コノドント研究は層序、分類、古生物地理、古海洋解析、古生態等まだまだ解決すべき課題が多く残されていることを強く感じた。実際、古典的な標準地域の見直しがすすめられ、新たな層序学的事実が明らかにされつつある。またレスター大学の Purnell, M. やその共同研究者を中心に行われているコノドント動物の解剖学的検討が進み、現世魚類との比較研究、進化学的研究、さらには分子生物学的研究手法も取り入れた新たな研究の息吹を感じる事ができた。イギリスやアメリカの研究者との個人的な話では世界的な古生物学の“衰退”に伴い、若いコノドント研究者が育っていないと嘆いているものが多かった。確かに、現在国際的に活躍している30～40歳代の“中堅”研究者は少ないように思われる。しかし今回のシンポジウムでは20才代の大学院生や学位取りたての若い研究者が多く集まり、また最近の国際的なコノドントに関する出版物を見る限り、ヨーロッパ、アメリカでは若い研究者も着実に育っており、コノドント研究の重要性と、研究者層の厚さを感じる事ができる。

筆者らは開催2日目のシンポジウム (4) Conodonts, paleobiogeography and palaeoceanography において、Middle and Late Ordovician conodonts from the Langkawi Islands, Peninsular



図2. レスター大学地質博物館で行われた日本企業の後援により開催された歓迎会

Malaysiaと題し、口頭発表を行った。コノドントの研究に関しては国際会議初デビューの筆者（上松）であったが、講演後は多くの方々に声をかけられ、Pander Society が若手研究者の育つことを暖かく見守っている、そんな雰囲気を感じることができた。今回のシンポジウムでは、基本的にクレジットカードでシンポジウムの登録料を払い込んだものだけが講演できるシステムになっており、結果として口頭発表に関しては全くキャンセルがなかった。またシンポジウム全体として和気藹々とした中にも、発表・討論に関しては当然であるが時間厳守が徹底され、緊張感のあるシンポジウムでもあった。

なお、朝食・夕食と宿泊は講演会場から車で10分ほどのところにある大学内の植物園に隣接するBeaumont Hallと呼ばれる研修所で行われた。夕食は完全なコース料理で典型的な(?)イギリス料理を堪能した。シンポジウム会場とBeaumont Hallの間は、朝夕1便の二階建てバスによって移動した。シンポジウム初日の講演終了後に、レスター大学の地質博物館において、現地で精密機器を販売する日本企業の後援により、歓迎会がひらかれた。恐竜や魚類化石の標本を触りながら、ワインやビールを飲み、軽食を頂くことができた(図2)。日本では博物館において、展示標本を触りながら酒類を飲むという、このような状況はまず考えられないことである。

3日目の中日はNorth Staffordshireの石炭系の見学と、ロンドンの自然史博物館への1日巡検が組まれていたが、筆者らは自然史博物館の巡検に参加した。ロンドンの北約200 kmに位置するレスターからロンドンまで高速道路を使うと、道路が空いている時は3時間弱で到着できるが、当日は高速道路とロンドン市内の大渋滞に巻き込まれ、自然史博物館に着いたのはすでに正午を過ぎていた。この夏、ヨーロッパは連日猛暑が続き、ロンドンでは夏場でも30°C度を越えることがほとんどないことから、観光バスには完全なエアコンが設置されておらず、到着するまでひたすら我慢を強いられた。自然史博物館では参加者が約10名ずつのグループに分かれ、専任の学芸員に案内され、通常一般には公開されていない資料室に所蔵してあるコノドントや有孔虫等を見学する機会に恵まれた。しかしながら、帰りのバスの時間もあり見学には十分な時間も取れず、消化不良の一日巡検であった。

開催4日目の夜にバンケットが催された。会場となったCoombe修道院はレスターからバスで1時間ほどの場所にあり、中世の建造物の一角に、パフォーマンスと食事を楽しめる広間とパブが備わっている。鎧や剣が飾られた厳かな雰囲気の中で肅々と晚餐会が進行するかと思いきや、料理が運ばれるたびにミュージカル風に仕立てられた演劇が繰り広げられ、会場は大いに盛り上がった。照明が落とされていたため料理が見えず、フィンガーボールの水を飲んでしまったのも楽しい思い出である。シンポジウム最後の



図3. 下部オルドビス系炭酸塩岩中のmicrobialite。白く見える部分がドロストーン、チャートで置き換わったmicrobialite。

夕食であったため、お互いに記念写真を撮りあう光景が多く見られた。

巡検の報告

我々の参加した後半の巡検はIapetus -from coast to coastと呼ばれる6泊7日の巡検で、古生代オルドビス紀に、ローレンシア、ゴンドワナ、バルチカ、およびシベリア大陸の間に存在したIapetus海で堆積し、現在スコットランド内に露出する主に古生代前・中期の地層を見学する巡検である。巡検コースがスコットランド南部から北部を縦断することからこのような名称が付いたものと思われる。巡検案内者はArmstrong, H. A., Raine, R. J., およびSmith, M. P.で、3人とも古生代コノドントの研究者である。Raine, R. J.はコノドントだけではなく、堆積学、テクトニクスにも詳しいパーミンガム大学の若い大学院生である。参加者は我々日本人2名、中国から3名、アメリカ合衆国4名、オーストラリア1名、イギリス6名の計16名で、ミニバン2台(1台は荷物専用)で、案内者自らが運転して移動した。巡検初日は観光地で有名な湖水地域に広く分布するオルドビス系の見学であった。

オルドビス紀後期にゴンドワナ大陸の縁辺域に小大陸として存在していたAvaloniaテレーンの北側に、泥岩や石灰岩からなる地層が広く堆積し、それらは一括してWindermere超層群と呼ばれている。これらの地層は豊富な筆石やコノドントの産出により、詳しい層序が立てられている。特にTorver High Commonと呼ばれる高原地域にはオルドビス系、シルル系が分布し、オルドビス系最上部Ashigillianの模式地になっている。案内された道路の切割りや廃鉱で各自思い思いのコノドントや筆石の採取を行った。2日目はSouthern Uplandのオルドビス-シルル紀付加体堆積物の見学が主な目的である。まれにチャートを含む筆石泥岩とそれを覆うタービダイトを主体とする碎屑岩が一つのユニットとなり、それらがスラストで何回か繰り返し、南方に向かい地層の上限の年代が若くなるという、日本の四万十帯、秩父帯でなじみの深い付加体研究の先駆けとなった地域の見学を行った。筆者らはこの巡検以前に、この付加体を構成するチャートの酸処理を行う機会に恵まれたが、得られた放散虫標本の保存状況はよくない。それに比較し、赤色チャートの表面には白色の保存良好なコノドントが豊富に含まれている。また筆石を含む黒色頁岩は古典的なフィールドとして、Harfell Spa, Dob's LinnやLinn Branch Trenchで詳しい見学ができた。この地域は筆石研究の大家であるLapworth, C.が詳しい層序学的研究を行っている。Linn Branch Trenchでは筆石化石によりほとんど直立した泥岩層の中にオルドビス-シルル紀境界が確認され、国際境界模式層断面(GSSP: Global Boundary Stratotype Section and Point)として認定されている。

3日目はHighland Border Faultに沿って露出するDalradian超層群とオフィオライトや化石を多産するオルドビス系石灰岩、旧

赤色砂岩等からなる Highland Border Complex の見学をする予定であった。しかし、2時間以上急な坂道を見学予定の露頭まで歩いたが、結局露頭が確認できず、この見学予定はすべてキャンセルとなり、次の宿泊地への移動となった。4日目はスコットランド北西端部に位置する Durness 周辺に分布するカンブリア紀～中期オルドビス紀の炭酸塩岩からなる Durness 層群の見学が主目的であった。英国で最も北にあるゴルフコースの南に、Balnakell 湾の海岸沿いに約 2 km に渡り、浅海性の石灰岩が露出する。所々に見事な 1～2 m 規模のドーム、柱状のストロマトライトが観察される。ストロマトライト以外にも、ドロストーン、チャート、石膏等に置き換わった多様な microbialite が見られ (図 3)、この石灰岩層が潮間帯付近の特殊な環境で堆積したとの説明が案内者からあった。このような特殊な環境で堆積した石灰岩にもコノドントは含まれ、コノドントによりカンブリア紀/オルドビス紀境界が確定されている露頭の見学もできた。筆者らは見事なストロマトライトをはじめ、多様な microbialite が古生代前半に大量に形成されていること、また特異な環境でもコノドント動物は生息でき、かつ詳細なコノドント化石層序が現地の研究者により設定されていることに感銘を受けた。5日目は宿泊地 Inchadamph 近郊の Assynt 湖北岸に露出する前期カンブリア紀碎屑層の見学を行った。シーケンス層序学を基本とした詳しい堆積学的な説明が行われた。このセクションからはコノドント化石の産出はないが、一部に Skolithos をはじめ、Palaeophycus, Planolites, や Cruziana 等の生痕化石を観察することができた。また、ほとんど高木のない草原・高原地帯にカレドニア衝上断層群の発達する様子が、地形上に認められ、雄大な望遠地質学の醍醐味を味わうことができた。午後最後の宿泊地であるエンジンバラに向かった。途中 Highland 地域の壮大な氷河地形やテクトニクスの説明があった。エンジンバラに到着したのは午後 11 時を回っていた。

この巡検は 27 日朝、ミニバンでエンジンバラを発ち、午後レスターに戻り解散の予定であったが、筆者らは日本への飛行機の便もあり、27日朝、国内線でロンドンに向かった。7月にはイギリスではフィールド調査には最もよい時期であるとのことで、実際今回のシンポジウムと巡検を通して、ほとんど雨に降られことがなかった。巡検では宿に戻ると、案内者をはじめ、イギリス、アメリカからの参加者はレストランのバブに直行。乾燥したフィールドから戻り、ビールを飲むことが何よりの楽しみとのことで、筆者らも彼らに誘われるまま、のど越しさわやかなビールを頂いた。

終わりに

シンポジウムでは国際的に第一線で活躍している専門家と議論ができたこと、巡検では教科書に載っている古典的なフィールドとコノドント化石の模式層序断面を見学することができたこと等、きわめて有意義な時間を過ごすことができた。経済的・時間的制約もあるかと思うが、若い研究者には積極的に国際会議に出席・講演し、可能な限り巡検に参加されることをお勧めしたい。最後にこのシンポジウムを企画・運営されたレスター大学の Purnell, M. 博士, Aldridge, R. 博士をはじめ関係者各位、また充実した巡検の企画者・案内者各位に感謝いたします。

上松佐知子・指田勝男 (筑波大学生命環境科学研究科)

出席：北里会長、天野、安藤、長谷川、平野、平山、加瀬、甲能、近藤、前田、間嶋、真鍋、尾田、小笠原、大野、大路、瀬戸口、生形、柳沢
欠席：松本名誉会長、安達 (→小笠原)、西 (→長谷川)、小澤 (→生形)、棚部 (→大路)、富田 (→真鍋)、植村 (→加瀬)
書記：豊福、鈴木庶務幹事

報告事項

常務委員会報告 (生形)

庶務 (生形)

1. 分類学会連合より日本産生物種数調査に関するアンケートへの回答依頼があり、担当委員の佐々木猛智君に対応を委任した。
2. 大学評価・学位授与機構より、機関別認証評価に関わる専門委員の選考結果について通知があり、本学会から推薦した候補の推薦が見送られた。
3. 女性科学者に明るい未来をの会より猿橋賞受賞候補者の推薦依頼があり、評議員 ML で推薦を募ったが、推薦は無かった。
4. PR の図について京都大学の佐藤智之氏より使用許可申請があり、使用許可書を送った。対象論文と転載先は以下の通り。
対象論文：Sakakura, N., 2002: Vol. 6, p. 101-120. figs. 1, 3.
転載先：第 17 回国際堆積学会議 巡検案内書
5. 日本学術会議の「科学者倫理への取り組み」についての調査書に回答した。
6. 学術振興会のプログラムオフィサー制度等の説明・意見交換会に出席した。
7. Island Arc 編集長の石渡 明氏より Editorial Advisory Board の交代に関する問い合わせがあり、棚部一成君から北里 洋君への交代を依頼した。
8. 日本学術会議より地球惑星科学連合を経由して、平成 18 年度代表海外派遣及び派遣候補者の追加募集があった。ML で評議員に周知した。
9. 江崎洋一君と指田勝男君に賞の委員会委員の委嘱状を送った。
10. 日本学術協力財団の学術団体調査票に回答した。
11. 地質情報整備・活用機構より、2006GUPI GEOFORUM-2 『J-GEOPARKS (仮)』への後援依頼があり、承諾の返事を送った。
12. 文部科学大臣表彰の科学技術賞理解増進部門に佐藤たまき・長谷川善和両君を、若手科学者賞に藻谷亮介君をそれぞれ推薦した。
13. 地球惑星科学連合のセッション提案とプログラム委員選出に関するアンケートに回答した。レギュラーセッションに「地球生命史」、スペシャルセッションに「化学合成生態系の進化をめぐって」を提案し、プログラム委員には北村晃寿君 (正) と延原尊美君 (副) を推薦した。
14. 学会講演予稿集の頁について石油資源開発株式会社の宮入 誠氏より使用許可申請があり、使用許可書を送った。対象と転載先は以下の通り。
対象：三輪ほか, 2006: 日本古生物学会第 155 回例会講演予稿集 p. 73.
転載先：三輪ほか, 2006: 基礎誌録「佐渡南西沖 D」井の鮮新統西山層の浮遊性有孔虫化石群集 (予報), 平成 17 年度 技術研究所公表成果集, 石油資源開発株式会社。
15. 化石の図について東北大学総合学術博物館の佐藤慎一君より使用許可申請があり、使用許可書を送った。対象論文と転載先は以下の通り。
対象論文：佐藤・金澤, 1996: 79号, p. 90-99. 図 6.
転載先：Sato, S.: Plankton & Benthos Research への投稿論文。
16. PR と化石が学術刊行物として指定された。
17. PR が J-stage の電子アーカイブ対象誌に選定された。化石は選ばれなかった。9.4 倍の狭き門であった。
18. PR と化石の図について茨城大学の安藤寿男君より使用許可申請があり、使用許可書を送った。対象論文と転載先は以下の通り。

学会記事

日本古生物学会 (2005・2006 年度)

第 4 回定例評議員会議事録

日時：2007年2月2日 (金) 9:30-12:55

場所：徳島県立博物館 3 階講座室

- 対象論文：Hasegawa, T., 1999: PR, Vol. 3, p. 173-192. Fig. 3.
Hasegawa, T. & Hatsugai, T., 2000: PR, Vol. 4, p. 95-106. Fig. 7.
栗原・川辺, 2003: 化石, 74号, p. 36-47. 図4.
転載先：第17回国際堆積学会議 コースFEA1の巡検案内書。
19. TPPSJの図について高知大学の岩井雅夫君より使用許可申請があり、使用許可書を送った。対象論文と転載先は以下の通り。
対象論文：Kurihara, K., 1968: N.S. no. 70, p. 267-283. Figs. 1, 2.
転載先：岩井ほか, 2006: 唐の浜層群の層序と化石。見学旅行案内書, 地質学雑誌, 112巻補遺。
 20. 文部科学大臣表彰科学技術賞への推薦に関して、文部科学省でヒアリングを行い、候補者調書を一部修正して再提出した。
 21. 東北大学より高柳洋吉君の叙勲申請のための資料提供依頼があり、情報を提供した。
 22. 光記念館の「隕石・恐竜展II」の後援名義使用許可依頼に対して承諾の返事を送った。
 23. UMINより古生物学会の情報更新依頼があったが、特に更新すべき点がなかったので、変更なしと返答した。
 24. PR, TPPSJ, 化石に掲載された論文の金沢大学電子版書庫への登録・公開申請に対して許諾書を送った。ただし、雑誌掲載後一年以上の条件付である。
 25. 日本学術会議主催講演会「博物館が危ない！美術館が危ない！-指定管理者制度・公共サービス改革法の落とし穴-」への後援依頼に対して、承諾の返事を送った。
 26. 年会の講演要旨のコピーPDFを個人のHPのコンテンツとしたという申請があったが、許諾できない旨を伝えた。
 27. 国立情報学研究所に学協会情報発信サービス利用申請書を送った。
 28. TPPSJNSの図について Ivan Rakovec 古生物研究所の Spela Gorican 氏より使用許可申請があり、使用許可書を送った。対象論文は以下の通り。
対象論文：
Hori, R. 1988: No. 151, p. 543-563. fig. 6-1b.
Hori, R. 1990: No. 159, p. 562-586. fig. 8-13, -14, -16, -19, -21, -24, -25, -27, -30; fig. 9-32, -37, -42, -43.
Nagai, H. and Mizutani, S. 1990: No. 159, p. 587-602. fig. 3-8c.
Matsuoka, A., 1991: No. 161, p. 720-738. fig. 2-1a; fig. 3-1a; fig. 4-1a, -2a; fig. 5-3a, -4; fig. 6-1a, -1b, -3, -5; fig. 7-1a, -1b; fig. 8-1a, -2a, -2b, -3, -4; fig. 9-1; fig. 10-1a; fig. 11-1a, -2, -3.
 29. 化石に掲載された論文の千葉大学学術成果リポジトリへの登録・公開申請に対して許諾書を送った。ただし、雑誌掲載後一年以上経過の条件付である。
 30. 丸善より「恐竜学」の印税の一部を学会に振り込むという連絡があったので、振込先を通知した。
 31. 国立情報学研究所より電子図書館に関わる申し合わせの改定について問い合わせがあり、学協会担当者IDとパスワードが発行された。
 32. メディア・リサーチセンター株式会社より送付されてきた「雑誌新聞総カタログ2007年版」の掲載原稿を校閲して返送した。
 33. 「わが国における海洋研究船の現状と将来への提言」シンポジウムおよびワークショップ世話人(谷口 旭, 徐 垣, 西田周平の各氏) および出席者一同から、上記提言に関する意見書の提出を求められたため、賛同するという回答を送った。
 34. 日本学術会議イノベーション推進検討委員会より「イノベーション25戦略会議」の提言に盛り込む意見書の募集があった。評議員MLで案を募ったが、提案がなかったので、庶務が会長と相談のうえ原案を作成して提出した。後日、学術会議より、本提案を報告資料に採録する通知があり、内容の公表可と返答した。
 35. 日本学術会議より「科学者の行動規範」を受け取った。
 36. 徳島例会での特別講演を依頼している中国科学院南京地質古生物研究所所長の沙 金庚教授(中国古生物学会会長)に会長名で依頼状を送った。
 37. 三菱財団より自然科学研究助成の募集案内があった。
 38. 東京大学出版会より Saito *et al.* (1981) の復刻承諾書を受け取った。
 39. 学術会議より、IYPE シンポジウム「国際惑星地球年 2007-20090-国際惑星地球年開催宣言式典-」への協賛依頼があり、承認の回答を送った。
 40. 会誌送送をクロネコヤマトメール便に変更。一便あたり80円に下がる。
 41. 学術著作権協会より電子メールアドレス変更の通知を受け取った。今後、PRと化石の「出版物の複写権等委託済表示」内の当該アドレスを書き換える。
 42. 学術振興会より、科学研究費補助金(研究成果公開促進)「学術定期刊行物」「データベース」の使用について、競争入札の原則義務化の通達があった。
 43. 科学技術振興機構より、科学技術情報流通技術基準普及説明会開催の案内があった。
 44. 国立情報学研究所より、平成18年度電子図書館サービス連絡会議開催の案内があった。
 45. Paleontological Researchの図について庄原化石集談会の古川義雄君より使用許可申請があり、使用許可書を送った。対象論文と転載先は以下の通り。
対象論文：Kohno, N. 1997: Vol. 1, No. 4, p. 313. Fig. 2.
転載先：古川(2007), 備北層群研究論文目録。
 46. 地質情報整備・活用機構より、GUPI GEOFORUM-3「地域観光資源とビジター産業」への協賛以来に対して、承諾の返事を送った。
 47. 北海道大学COE新・自然史科学創成プログラムより、国際シンポジウム「The Origin and Evolution of Natural Diversity」への共催依頼があった。
 48. 「化石」の図について神奈川県立生命の星・地球博物館の石浜佐栄子氏より使用許可申請があり、使用許可書を送った。対象論文と転載先は以下の通り。
対象論文：北里, 2003: No. 74, p. 74. 図1.
転載先：石浜佐栄子, ジュラ紀前期の海洋無酸素事変の研究に関する進展と動向. 神奈川県立博物館研究報告自然科学
渉外(植村)
1. Paleontological Research誌の科学研究費補助金(学術定期刊行物助成)を11月15日に日本学術振興会に申請した。応募領域は、理工系(数物系科学B)と生物系(生物学)の広領域とし、申請金額は1号あたり180万円(1,400部印刷)とした。
 2. PR誌の科研費申請に際し、日本学術振興会より経理事務および監査体制についての追加資料を求められ、12月7日に提出した。採択された場合、印刷は原則競争入札となり、さらに会計士が作成した収支決算資料の提出が義務付けられる。次回の交付申請までには、監査体制の見直しや会計規定の整備が必要であろう。
 3. IYPE小委員会の第2回会議が11月10日に開催された。平成19年1月22日(月)に国際惑星地球年開催宣言式典が開催された。
 4. 大学評価・学位授与機構から機関別認証評価に係わる専門委員候補者の推薦依頼があった。常務委員会で審議の上、評議員MLで候補者を募った結果、平野弘道君と齋藤靖二君を推薦した。
- 会計(加瀬)**
1. 2006年松江年会の参加者は202名(一般会員106, 学生会員45, 名誉会員1, 非会員43, 招待者2, 島根大学関係者5)で、学会からの支出は301,089円であった。
 2. 学会資金・基金の明朗な運用のために、学会が所有する預貯金口座の整理を進めている。
 3. 今後、学会出版物の販売価格が税込みであることを表示する。
 4. 経理の明朗化のため、系の預かり金を廃止して会務に伴う支出を立て替え払いに切り替えた。
 5. 会費納入状況は、普通会员会費収入はほぼ予算通りだが、特別会員会費収入は滞納者への支払いを働きかけた結果予算を大幅に上回る見込みである。12月16日現在、2年末納38名、3年末納50名、4年末納18名、5年以上未納50名である。滞納者には徳

島例会のプログラムに督促状を同封した。

行事(柳沢)

1. 第156回例会(徳島)のプログラムを印刷し、学会事務局から発送した。
2. 第156回例会では、シンポジウム講演6件、招待講演1件、一般口頭発表69件、ポスター発表28件が予定されている。既定の120,000円の支出で賄える見込み。
3. 第156回例会の講演予稿集を印刷した。
4. 2007年年会・総会(大阪市立大学)のシンポジウム案として「中生代温室期の地球生物相」が提案されている。演者として江崎洋一君、増田富士雄君、劉建波氏(学振で大阪市立大学に在籍中)、近藤康生君、八尾昭君、中森亨君等が挙がっている。
5. 2007年年会・総会では、会場費として少なくとも数万円の支出が見込まれる。
6. 講演申込用紙にある「3. OHP」と「4. 35 mmスライドプロジェクター」の項目を削除し、その代わりに「OHPやSlide等使用希望の場合は行事係に相談」という旨の一文を付記する。
7. 複数のポスターを同時に説明できないので、ポスター発表は筆頭発表1件に限る。口頭発表については、従来通り2件まで認める。

企画・広報(間嶋)

1. 学会HPの更新を行った。
2. 学会HPのサーバーを国立情報学研究所に移転する手続きをすすめている。

国際交流(大路)

1. ロシアから一般向けに発行する雑誌への協力依頼があった。
2. IPAの役員が決定し、本学会の北里洋君がmembers at largeの一人に選ばれた。
3. 交換図書の未着が2件。未着巻号を送付して対処済み。
4. 古生物学会への交換図書が返送される件が1件あった。現学会事務局住所を知られた。
5. 日本におけるジオパーク実現にむけて、地質学会主体で「ジオパーク推進委員会」が立ち上がる。地質科学学協会連合代表の天野一男氏から協力要請があった。
6. インド地質学会より定期刊行物交換希望があった。

電子ジャーナル, ISI(真鍋)

1. ISIにPRのVol. 10, no. 4からVol. 11, no. 2までの3号を審査対象として申請した。
2. 電子投稿システムScholar Oneが2007年1月より試行開始した。

友の会(安達)

1. 会員の出入りが多少あるが、特筆すべきことはない。
2. 会計一本化を検討中だが、来年度は従来の運営形態を踏襲したい。

会員の入退会(前田)

1. 前回の評議員会議以降、入会19名(沼波信、河野重範、北川博道、鈴木久仁博、宇佐見和子、本川雅治、山本なぎさ、鈴木紀充、猪瀬弘瑛、幡則和、實吉玄貴、黒木拓洋、福嶋徹、宮田真也、Aaron William Hunter、米倉宏晃、Francis Hirsch、廣田隆吉、比嘉啓一郎)、英文誌購読1名(Michael A. Kaminski)、退会10名(福田芳生、佐藤洋子、溝口秀勝、岸田容司郎、渡邊美樹子、戸田健太郎、大森昌衛、一川眞澄、池田正、早坂祥三)、逝去2名(山田佳邦、箕輪深雪)で、2007年2月2日現在の会員数は1,173名である。
2. 特別会員に推薦された22名の会員のうち、18名(石垣忍、安井健介、柏木健司、滝本秀夫、辻野匠、鈴木茂、長澤一雄、鈴木直、鏑本武久、中澤努、三戸太郎、三輪美智子、林広樹、木村敏之、太田泰弘、谷本正浩、梅田真樹、亀尾浩司)が会員資格変更を受諾した。

編集状況報告

欧文誌(小笠原)

11巻1号は7編の掲載予定で、出版準備に入った。11巻2号は受

理済みの6編を予定している。3号は現在受理2編である。その他は現在修正20編、査読7編、査読準備中3編である。

化石(西;代理生形)

1. 現在81号を編集。入稿済み5編(総説、論説、解説、記事)。2月の第1週には全原稿が入稿される予定。
2. 今後は以下のような特集を計画している。
 - 第81号:腕足動物に関する特集号(井龍)
 - 第82号:日本海シンポジウム特集号(天野ほか、島根大学シンポジウム特集号)
 - 第83号:「中生代温室期の地球生物相(仮題)」(江崎ほか、大阪市大シンポジウム特集号)

連合・学術会議報告

地球惑星科学連合(北里)

1. 次回連合大会は、2007年5月19日(土)~24日(木)に開催される。本会共催の「地球生命史(コンビナー:北里・西)」がレギュラーセッションとなり、他に古生物学に関連の深いトピックセッションとして、「化学合成生態系の進化をめぐって(コンビナー:延原・間嶋)」、「遠洋域の進化(コンビナー:松岡ほか)」、「低緯度域の気候変動と間接指標の開発(コンビナー:川幡ほか)」などがある。
2. 次回連合大会において小学生から参加できるアウトリーチ企画が検討されていたが、今年度は見送ることになった。
3. 教育問題検討委員会の下に教員養成等検討小委員会が立ち上がった。
4. 学術会議の地球惑星科学分野連携会員に58名が選出されている。学術会議との共同シンポジウムを地球惑星連合大会時に開催する。

学術会議(北里)

1. 約200名の第2次連携会員が決定した。本会会員からは、第1次選出の岡田君に加え、北里、真鍋(幹事)、西田(幹事)、大路、齋藤の各君が名を連ねることになった。
2. 古生物学分野は、第二部と第三部にまたがる分野だが、自然史・古生物学分科会は第二部に属していて、第三部には古生物学に関連した分科会が無い。そこで、第二部の自然史・古生物学分科会を第三部の地球惑星科学委員会とも共管とする案が提案された。
3. 自然史・古生物学分科会の当面の活動は、博物館法改正問題への取り組みが中心となっている。
4. IPA対応の分科会は設けられないことになった。

地惑連合教育問題検討委員会(天野;補足平野)

1. 天野君から間嶋君に委員を変更する。
2. 高校理科における地球惑星科学分野のあり方について議論している。教養理科必修案には賛否両論がある。
3. 現在中央教育審議会に38学協会が協力学術団体として登録されている。今後学術会議との連携を計るため、連携会員の把握に努める。

自然史学会連合(甲能)

1. 12月9日に国立科学博物館分館で2006年度総会が開催された。日本地衣学会の新規加盟が承認され、加盟学会は38学協会となった。
2. 自然史学会連合は、日本学術会議第20期の協力学術研究団体として登録された。
3. 11月4日に東大で開催された学術会議の公開講演会「博物館が危ない!美術館が危ない!—指定管理者制度・公共サービス改革法の落とし穴—」を後援した。
4. 11月12日に連合講演会「教科書で学べない自然史」を神奈川県立生命の星・地球博物館で開催し、110名の参加があった。
5. 来年度の連合講演会(内容未定)は、2007年11月25日に滋賀県琵琶湖博物館で開催予定。

分類学会連合（佐々木；代理生形）

第6回総会が2007年1月7日（日）に国立科学博物館分館にて開催された。

補助金・受託研究費等取扱規定を制定した。

将来計画委員会（北里）

2007年度から始まるグローバルCOEについて、機関横断型の古生物学拠点の可能性について検討している。申請するグループの中で古生物学がコミットできるところがないかどうか、各大学の動向を調査している。

IYPEについて（植村；代理生形）

平成19年1月22日（月）に東京大学で催されたIYPEシンポジウム「国際惑星地球年2007-2009」国際惑星地球年開催宣言式典（本会協賛）に大路君が出席した。2008年がcore年となる。

IUGS-EC参加報告（北里）

1月16日～20日に奈良で行われたIUGS-Executive Committee会議に参加した。IPAのPaleoParks計画に50,000ドルの支援要請があったとのこと。学術会議IUGS国内委員会（委員長：松本 良氏）より依頼のあった開催支援に対して、本会から5万円を支援した。

評議員選挙実施計画（生形）

2月：被選挙人名簿原案の作成、投票用紙原稿の作成、投票用封筒の原稿作成および印刷、投票用封筒の郵便料金別納申請。3月：投票用紙の最終確認（次回常務委員会）、投票用紙の印刷、事務局より発送。投票期限4月末、5月静岡大学で開票の予定。

その他

学術賞、論文賞の推薦手続きを確認した。

審議事項**長期会費滞納者の処分について**

複数回に渡る会費納入の督促にもかかわらず、2007年2月2日現在112名の会員が3年以上支払いを滞らせている。これらの会員については、評議員会運営規則申し合わせ「会費を1年以上滞納した者のうち、3年を超えて諸会則の履行が認められない者は、評議員会の議を経た時点で除籍することができる」に則り、2月末日をめどに除籍の手続きに入ることが承認された。一方で評議員が中心となって督促を継続し、除籍手続き完了前に会費の納入が確認された場合には処分を即時に中止する。除籍執行後も、1年分（学会誌送付分）の債権回収努力は続ける。

会計の一本化について

一般会計と特別号会計を分けていた従来の会計を改め、学会会計を一本化することとした。新たに設ける基金などの具体案を常務委員会で検討し、次回総会に諮るよう進める。

電子投稿査読システムAdminの件費について

PRに電子投稿査読システムを導入するに当たり、システムアドミニストレーターの件費として30万円を新たに今年度予算に計上することとした。

事務局職員の雇用形態について

事務局職員の雇用元をUniBio Pressに移し、学会事務をUniBio Pressに委託する形態に変更する案について検討した。合法性を十分に確認した上で、常務委員会が状況を判断して対応することとした。

古生物学学会会計規定新設について

- 古生物学学会会計規定を新設することとした。科学研究費補助金の適正な執行が強く求められる中、研究成果公開促進費などの使用に際して本会がこれまで以上にコンプライアンスにつとめるためである。庶務が作成した原案を常務委員会で検討し、次回評議員会の議を経て次回総会に諮る予定で進める。
- 来年度のPR刊行助成が採択された場合、会計規定の提出を求められる可能性がある。その場合には、作成中の粗案を仮提出することとした。

2007年年会のシンポジウム案について

2007年年会におけるシンポジウム案「中生代温室期の地球生

物相」（世話人：江崎洋一・八尾 昭・劉 建波）を承認した。本シンポジウムは国際惑星地球年（IYPE）関連事業として開かれる。

第157回例会開催地の決定

- 第157回例会を、2008年2月1日（金）～2月3日（日）に栃木県宇都宮市で開催することとした。宇都宮大学と栃木県立博物館の共催を検討している。
- 今回は大学共催による会場費の節約も補助金の工面も難しいことから、開催経費のほかに会場費として最大14万円の支出を認めた。背景には大学等の独法化があるが、今後も開催費の節約・工面のための様々な努力を続けることを確認した。

ワークショップへの補助要請について

「The解剖学」古生物学スプリング・ワークショップ（世話人：大橋智之、ロバート・ジェンキンス、大路樹生：2007年3月19日（月）～21日（水））への補助を承認した。講師招聘旅費ほか67,400円を補助する。学会ホームページ等で会員への周知を図る。

講演の写真撮影について

発表者の著作権を保護するために、撮影の際に発表者の了解を得るように促す注意書きをポスター会場と各講演会場に貼ることとした。

ポスター賞選考委員の選出

第156回例会のポスター賞選考委員に長谷川四郎君、平野弘道君、平山 康君、大路樹生君、柳沢幸夫君を選出した。とりまとめを長谷川君に依頼した。

古生物学学会倫理規定案ならびに会則への条文追加案について

前回評議員会で倫理規定の制定が承認されたのを受け、庶務が作成した原案を検討した結果、研究資料の取り扱いに関する条文の表現について常務委員会で再検討することになった。次回評議員会での議を経て、会則改定案とともに次回総会時に諮る。

出版編集規定ならびにPR投稿規定改訂案について

電子投稿システムの導入に伴い、「日本古生物学学会出版・編集規定」ならびに「Paleontological Research投稿規定」を以下のように改訂する原案を承認した。さらに他の規定と矛盾がないかどうかを常務委員会で検討し、あれば必要に応じて修正する。

日本古生物学学会出版・編集規定

- 第1条 1) 旧)「原著論文および短報、ならびに本会記事を掲載」
新)「原著論文、総説、短報、ならびに本会記事を掲載」
- 第1条 1) 旧)「非会員の投稿も編集委員会及び常務委員会の議を経て掲載することができる」
新) 削除
- 第8条 旧)「受付日の順に掲載する」
新)「受理日の順に掲載する。受理日が同じ場合は受付日の順に掲載する。」

Paleontological Research 投稿規定**A. 投稿規定**

- 原稿の種類 旧)「原著論文(Articles)と、」
新)「原著論文(Articles)および総説(Review)と、」
- 投稿 旧)「原著投稿の際には正規の論文原稿のほか、図・表を含む完全なコピー2組と」
新)「投稿の際には図・表を含む完全なコピー3組と」
さらに、条文の最後に「電子投稿査読システムを用いる場合は、当該ホームページの指示に従う。」と付け加える。

永年会員の顕彰制度について

会員歴50年以上の会員に対して、本会への永年の貢献を称えるため、感謝状を贈呈して検証することとした。実施初年度には、対象者全員に一括して贈呈する。

「地質の日」共同発起人受諾依頼について

地質調査総合センターが企画している「地質の日」の共同発起人となることを承認した。「地質の日」は、地質への興味・関心を広げ、かつ広く地質調査に携わる技術者・研究者を奨励する日として、5月10日を第一候補に制定が計画されている。

インド地質学会との定期刊行物新規交換希望について

インド地質学会より希望のあった定期刊行物の新規交換を承認した。

北大COE国際シンポジウムへの共催依頼について

北海道大学の21世紀COEプログラム「新・自然史科学創成」より依頼のあった国際シンポジウム「The Origin and Evolution of Natural Diversity」への共催依頼を承諾した。2007年10月1日～5日に札幌の北海道大学カンファレンスホールで行われる。

印刷所倒産に伴うSaito et al.の仕切り直しについて

Saito et al. 復刻版CD-ROMを「その他の出版物」として今年度中に発行する予定であったが、印刷所が倒産したために今年度事業では遂行困難となったため、来年度事業計画への繰越を了承した。

第3回評議員会議事録訂正について

2005・2006年度第3回定例評議員会議事録のうち、「特別会員の推薦」の項の訂正を了承した。次号化石に訂正内容を掲載するとともに、会長名でお詫び記事を掲載する。

その他

- 1. 学会規則・規定・内規集の最新版を9月出版の「化石」に1年おきくらいに掲載することとした。

受賞ポスター

第156回例会（2007年2月徳島県立博物館）優秀ポスター一賞

Robert. G. Jenkins 君・Andrzej Kaim 君・疋田吉識君・棚部一成君 後期白亜紀メタン湧水における笠貝類の基質選択性

庵谷奈津子君・堀 利栄君・池原 実君 海洋無酸素事変 (OAE1a) の検討

中川良平君・沼波 信君・米田 穰君・鶴野 光君・柴田康行君 福岡県平尾台における第四紀末の哺乳類化石の群集解析と14C年代測定による動物群変遷の解明



ポスター賞受賞者 左から中川良平君、Robert G. Jenkins 君、北里 洋会長、庵谷奈津子君

後期白亜紀メタン湧水における笠貝類の基質選択性 Robert. G. Jenkins, Andrzej Kaim, 疋田吉識, 棚部一成. A detailed scientific poster with multiple panels including maps, diagrams, and text in Japanese and English.

Robert G. Jenkins 君ほかのポスター

高知県四万十帯白亜系層状チャートにおける海洋無酸素事変(OAE1a)の検討. A detailed scientific poster with multiple panels including maps, diagrams, and text in Japanese and English.

庵谷奈津子君ほかのポスター

福岡県平尾台における第四紀末の哺乳類化石の群集解析と 140年代測定による動物群変遷の解明

中川良平(愛教大・院)・沼袋 慎(京大・院)・
米田 慎(京大・院)・風野 光(理研研)・栗田康行(理研研)

はじめに
更新世から完新世にかけての哺乳類化石は、化石の出土層位から推定される地層学的な位置関係から、古生物学的に重要なものである。日本や世界各地で化石が出土している。しかし、その出土層位が不明であることが多く、動物群の年代を推定することが困難である。この問題を解決するために、動物群の年代を推定するための方法として、AMSによる年代測定が注目されている。AMSによる年代測定は、放射性炭素14の濃度を測定することによって、動物群の年代を推定することができる。AMSによる年代測定は、動物群の年代を推定するための重要な方法である。AMSによる年代測定は、動物群の年代を推定するための重要な方法である。AMSによる年代測定は、動物群の年代を推定するための重要な方法である。

AMSによる140年代測定
AMSによる年代測定は、放射性炭素14の濃度を測定することによって、動物群の年代を推定することができる。AMSによる年代測定は、動物群の年代を推定するための重要な方法である。AMSによる年代測定は、動物群の年代を推定するための重要な方法である。AMSによる年代測定は、動物群の年代を推定するための重要な方法である。

各洞窟から産出した哺乳類化石の種目数
各洞窟から産出した哺乳類化石の種目数を表した表が掲載されている。表には、種目名、種数、およびAMSによる年代測定結果が記載されている。

平尾台における哺乳類化石群集の変遷
平尾台における哺乳類化石群集の変遷を示した図が掲載されている。図には、更新世から完新世にかけての哺乳類化石群集の変遷が示されている。

後期更新世
後期更新世の哺乳類化石群集の変遷を示した図が掲載されている。図には、後期更新世の哺乳類化石群集の変遷が示されている。

完新世
完新世の哺乳類化石群集の変遷を示した図が掲載されている。図には、完新世の哺乳類化石群集の変遷が示されている。

中川良平君ほかのポスター

2006年 交換・寄贈図書目録

日本古生物学会は交換・寄贈による内外の出版物を多数保有しています(古生物学会報告・記事no.120, 化石 56号, 58号, 60号, 62号, 64号, 66号, 68号, 75号, 77号, 79号を参照)。これらの蔵書は静岡県自然学習資料保存事業室(〒424-0806静岡市清水区辻4-4-17静岡県中部健康福祉センター庵原分庁舎内)で管理されています。図書の利用については化石78号をご参照下さい。

担当: 川辺文久

国外出版物

Australia

Memoirs of the Museum of Victoria: vol. 62 nos. 1, 2 (2005)

Transactions of the Royal Society of South Australia: vol. 130 part 1 (2006).

Austria

Annalen des Naturhistorischen Museums in Wien: 106 A (2004), 107B (2005).

Belgium

Palaeontos: vols. 5-8 (2004), vols. 9, 10 (2002).

Bulgaria

Geologica Balcanica (Sofia): vol. 35 nos. 1-2 (2005).

China

地質学報 *Acta Geologica Sinica*: vol. 80 nos. 1-12 (2006).

Acta Geologica Sinica (English edition): vol. 79 nos. 3, 4, 6 (2005), vol. 80 no. 1 (2006).

古脊椎動物学報 *Vertebrata Palasiatica*: vol. 44 nos. 1-4 (2006).

Czech

Acta Musei Moraviae, Scientiae Geologicae: vol. 90 (2005), vol. 91 (2006).

France

Documents des Laboratoires de Géologie Lyon: nos. 161, 162 (2006).

Geodiversitas: vol. 28 nos. 1-4 (2006).

Mémoire de la Société Géologique de France: nos.176, 177 (2005).

Palaeovertebrata: vol. 33 fasc. 1-4 (2004).

Germany

Berliner Paläobiologische Abhandlungen: Bd. 6, 7 (2005), Bd. 8, 9 (2006).

Geo. Alp: vol. 2 (2005).

Jahreshefte der Gesellschaft für Naturkunde in Württemberg: Nr.161 (2005).

Senckenbergiana Lethaea: Bd. 85 heft 2 (2005).

Stuttgarter Beiträge zur Naturkunde, Serie B (Geologie und Palaontologie): Nr. 356-359 (2005).

Verhandlungen des Naturwissenschaftlichen Vereins in Hambrug: NF42 (2006).

Zitteliana: A45 (2005).

Hungary

Annales historico-naturales Musei nationalis hungarici: vol. 97 (2005), vol. 98 (2006).

Fragmenta Palaeontologica Hungarica: vol. 22 (2004), vol. 23 (2005).

Israel

Israel Geological Society, Abstracts: 2006.

Italy

Bollettino della Società Paleontologica Italiana: vol. 44 no. 3 (2005).

Poland

Acta Palaeontologica Polonica: vol. 51 nos. 1-3 (2006).

Biuletyn Państwowego Instytutu Geologicznego: no. 417 (2005), nos. 418-420 (2006).

Geological Quarterly: vol. 50 nos. 1-3 (2006).

Prace Muzeum Ziemi, Polska Akademia Nauk: no.48 (2005).

Russia

Paleontological Journal (Russian edition): no. 6 (2005), nos. 1-3 (2006).

South Africa

Navorsing van die Nasionale Museum Bloemfontein: vol. 21 parts 1-4 (2005), vol. 22 parts 1, 2 (2006).

Spain

Boletín Geológico y Minero: vol. 117 nos. 1-3, special no. (2006).

Revista Espanola de Micropaleontologia: vol. 37 no. 3 (2005), vol. 38 no. 1 (2006).

Switzerland

Revue de Paléobiologie: vol. 24 no. 2, volume spécial 10 (2005), vol. 25 no. 1 (2006).

UK

Systematics and Biodiversity: vol. 4 issue 1-3 (2006).

USA

Proceedings of the California Academy of Sciences: vol. 57 nos. 1-38 (2006).

US Geological Survey, Professional Paper: 1680 (2005).

国内出版物

大学出版物

東京学芸大学紀要自然科学系：57集 (2005).

博物館出版物

御所浦白亜紀資料館報：7号 (2006).

北海道開拓記念館：研究紀要34号 (2006), 研究報告19号 (2006), 調査報告45号 (2006).

穂別町立博物館研究報告：21号 (2005).

三笠市立博物館紀要：10号 (2006).

瑞浪市化石博物館：研究報告32号 (2005), 33号 (2006).

山口地学会40年の歩み (2006).

以上

醸金者御芳名

棚部一成, 松岡数充, 天野和孝, 小林文夫, 指田勝男, 永広昌之, 左向幸雄

平成18年8月4日から平成19年3月22日までの間に, 上記の方々から本会へ醸金を賜りました. 古生物および本会の活性化のため有効に使わせていただきます. ご厚志に対し深く御礼を申し上げます.

醸金のための郵便振替口座番号は次の通りです.

00130-6-776553 日本古生物学会・醸金口

お詫びと訂正

化石80号掲載の第3回定例評議員会議事録に誤りがありました. ここに訂正すると共に, 関係される会員の方々にご迷惑をおかけしたことを心よりお詫びいたします.

日本古生物学会会長 北里 洋

審議事項の「特別会員の推薦」の項

誤

鈴木 直君 (1984: 括弧内は入会年), 太田泰弘君 (1987)
川端清司君 (1990), 長澤一雄君 (1991), 中沢 努君 (1991)
柏木健司君 (1993), 市原秀彦君 (1994), 梅田正樹君 (1994)
亀尾浩司君 (1994), 滝本秀夫君 (1995), 三戸太郎君 (1995)
辻野 匠君 (1996), 藪本武久君 (1996), 林 広樹君 (1996)
渡邊真人君 (1996), 鎌滝孝信君 (1996) の計16名が特別会員に推薦され, 全員を承認した.

正

西園幸久君 (1981: 括弧内は入会年), 鈴木 直君 (1984),
谷本正浩君 (1985), 石垣 忍君 (1986), 太田泰弘君 (1987)
長澤一雄君 (1991), 中澤 努君 (1991), 柏木健司君 (1993)
市原季彦君 (1994), 梅田真樹君 (1994), 亀尾浩司君 (1994)
滝本秀夫君 (1995), 三戸太郎君 (1995), 鎌滝孝信君 (1996)
木村敏之君 (1996), 三輪美智子君 (1996), 鈴木 茂 (1996)
辻野 匠君 (1996), 鏑本武久君 (1996), 林 広樹君 (1996)
安井謙介君 (1996), 渡部真人君 (1996) の計22名を特別会員に推薦した.

重要なお知らせ

本学会欧文誌 Paleontological Research では, 2007年2月より, 従来の郵便による投稿受付に加え, 専用ホームページ (<http://mc.manuscriptcentral.com/pr>) を用いた電子投稿査読システムの運用を開始しました. 投稿から受理までの審査過程がより迅速に行われるとともに, 投稿数の増大による学術的内容の向上が期待されます. 新しい投稿の手引きにつきましては, 日本古生物学会ホームページ (<http://ammo.kueps.kyoto-u.ac.jp/palaeont/>) をご覧ください. 皆様からの活発なご投稿をお待ちしております.

従来, 「化石」紙面上でのシンポジウム特集は, 古生物学会の年会および例会で開催されたシンポジウムの内容に基づいて行ってまいりました. 今後は誌面充実のため, 年会または例会でシンポジウムを行っていない内容に関しても, 特集を組むことを企画致します. 但し, 特集の企画は古生物に関連したもので, 編集委員会にて内容の検討をさせていただきます. 特集の企画をお持ちの方は, 編集委員長 (西 弘嗣, hnish@mail.sci.hokudai.ac.jp) までご連絡ください.